

太平洋戦争終結後、絞りの生産がほぼ戦前の水準に達した頃、「共同一致して徳義を重んじ、相互の親睦をはかる」つどい「有松絞頌徳会」が復活し、『絞開祖並びに物故功労者慰霊祭』が昭和26年（1951年）2月11日（絞開祖竹田庄九郎の命日）に執り行なわれました。翌年「中小企業等共同組合法」にもとづく組織として設立された「有松絞商工協同組合」が引き継ぎ、今日に至っています。



絞会館での神式慰霊祭

慰霊祭は、以前は絞会館横駐車場奥にある竹田庄九郎碑の前で行われていましたが、現在は絞会館に設けられた祭壇の前での神式による式典、絞開祖竹田庄九郎碑前でのお祓い、祇園寺での仏式による法要が行われています。

絞開祖 : 竹田庄九郎武則（1590?～1662年2月11日）

慶長13年（1608年）尾張藩の要請に応じて、阿久比の庄から有松に8名で移住してきた中の1人です。

慶長15年（1610年）名古屋城築城のとき、庄九郎は城に出向き、そこで豊後の人から絞り染めをもっているのを見て、製法のヒントを得て、有松で手蜘蛛絞りの手拭いをつくり、街道を旅する人々に販売を始めました。



また、白地に紺染の段だらに染める鍛染を考案し、騎馬の用具である手綱の用に供し、寛永18年（1641年）尾張藩二代目藩主徳川光友がはじめて尾張の国に入国せんと有松を通過したとき、鍛染（しころぞめ）の手綱を献上したところ、殊のほかこれを嘉賞せられたと伝承されています。これがのちほど尾張藩主により国産「有松絞り」と名づけられて天下に公表され、絞りの礎を確立しました。ゆえに偉大なる翁の功績をたたえ、有松絞りの開祖と称するゆえんです。

絞開祖 : 山田周太郎（1890年7月1日～1975年3月25日）

大正12年（1923年）に半木製の手動式絞機を考案し、「山周筋」とした新製品を登場させました。この機械は、巾に40本から50本の立て襷（ひだ）を絞縮した生地が漏斗（ろうと）形の口から縄芯をはさんで2反ずつ同時に出てくるので、多量に生産でき、生産性向上に大いに役立ちました。しかも染め上った製品は、立筋が鮮明でかつ美しい染め上がりでした。

山周筋は時代に合い、一躍業界の花形になりました。

物故功労者 : 歴代絞組合理事長

有松絞商工協同組合理事長として、有松絞りの発展に尽力された方々です。

有松絞り貢献者 : 有松絞りの発展に貢献した人たちの内、一部の方を紹介します。

・ **三浦玄忠の妻**

三浦玄忠は、名古屋城が築城された時、豊後の藩主竹中備中守に従って名古屋に来た侍医で、隠居したのち尾張に居住していましたが、この玄忠の妻は国元の豊後で見おぼえた括り絞りの手わざを修得していました。そのころ有松で九九利染を作製していると聞き、住まいを有松に移し、村人に絞りの技術を教えました。これが今にも伝えられている三浦絞りです。

・ **竹田庄九郎直治**（竹田家二代目当主）（1610～1697年1月12日）

絞り布を衣料製品（浴衣など）に使用したり、その色も藍染めのみでなく、植物の根葉から色素をとって、紅染めや紫染めも開発しました。店頭には藍染めした製品のあいまに紅染めや紫染めの絞りがならべられ、美観を呈し、旅人の購買心を誘いました。

天和元年（1681年）、尾張藩主徳川光友は竹田庄九郎に制作させた絹布の手綱を徳川幕府五代将軍に就いた綱吉に献上し、有松絞りを天下に知らしめました。



竹田庄九郎直治

・ **竹田文左衛門**（笹屋の四代目当主）

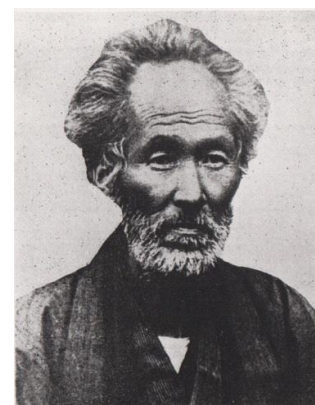
天明の大火後に鹿の子絞りを考案し、絞りに上品な美を加えました。

・ **鈴木金蔵**（舂屋伴左衛門の二男）（1837～1901）

絞り道具を開発し、絞染めの効率化と染め柄の美しさを同時に進め、絞りの生産性を一気に向上させました。発明された絞りは、板締絞・影絞・養老絞・新筋絞・嵐絞・ミシン絞など多数にわたっています。

絞り技術を大幅に向上させ、衰退気味の絞りを復活させた功績から「絞中興の祖」と称えられ、明治30年（1897年）「鈴木金蔵君紀功之碑」が祇園寺境内に建立されました。

なお、碑は現在、有松・鳴海絞会館駐車場奥に移設されています。



絞中興の祖 鈴木金蔵